

科学研究費補助金申請・採択の概要

研究課題： 日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究——国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに

研究種目： 基盤研究(A)(1)

課題番号： 14208022

補助金配分期間： 平成14年度～16年度

直接経費配分(予定)額： 平成14年度(4,300千円) 平成15年度(5,300千円)
平成16年度(6,700千円)

研究組織：

研究代表者	門倉正美	横浜国立大学留学生センター・教授
研究分担者	J. V. ネウストプニー	桜美林大学大学院・教授
	佐々木瑞枝	武蔵野大学文学部・教授
	二通信子	北海学園大学経済学部・教授
	三宅和子	東洋大学文学部・助教授
	山本富美子	立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部・教授
	村上京子	名古屋大学・留学生センター・教授
	堀井恵子	武蔵野女子大学文学部・助教授
	因 京子	九州大学留学生センター・助教授
	鈴木美加	東京外国語大学留学生日本語教育センター・助教授
国内研究協力者	嶋田和子	イーストウエスト日本語学校
海外研究協力者	李 徳奉	同徳女子大学・教授
	鄭 起永	釜山外国語大学・助教授
	徐 一平	北京外国語大学・教授
	曹 大峰	北京外国語大学・教授

研究目的：

①「日本留学試験」の影響を調査・研究し、「日本留学試験」の問題の質の向上および大学での日本語教育の質の向上に貢献することが、本研究の中心的な目的である。

「日本留学試験」とは平成14年度から実施される、学部留学生入試判定のための試験である。従来は「日本語能力試験」と「私費外国人留学生統一試験」の二本立てで行われていた留学生入試が「日本留学試験」によって一本化される。「日本留学試験」は年複数回、海外でも実施される等、留学生が日本の大学を受験しやすくし、ひいては学部留学生数を増加させることを大きな狙いとしている。

本研究は、「日本留学試験」のそうした目的を積極的に評価し、良質な留学生が日本の大学入学を志望するように、特に「日本語」の試験問題の質の向上に貢献する調査・研究を行う。また、本研究は、「日本留学試験」の「日本語」シラバスが唱える「アカデミック・ジャパニーズ（大学での学習・研究に必要な日本語力の養成）」というコンセプトに賛同し、これまでこうした教育理念をもっていなかった大学での日本語教育および大学入学前の日本語予備教育にたいして、

現在のところまだ抽象的な理念にとどまっている「アカデミック・ジャパニーズ」を具体化する教育内容体系・教材例を提起することによって大学入学前後の日本語教育体制の質的向上に貢献する。

この目的を達成するために、「アカデミック・ジャパニーズ」的な教育内容・方法についてこれまで先駆的に調査・研究を蓄積してきた研究者・教育者を広く日本全国および海外から募って研究集団を形成し、明確な役割分担のもとにインターネットを最大限に利用しつつ、オフラインの研究会活動も積み上げ緊密な総合的研究体勢のもとに、3年間の研究期間内に以下の課題を遂行する。

- 1) 「日本留学試験」の「日本語」の例題や出題された問題を分析・検討し、よりよい例題を豊富に対置することによって「日本留学試験」の問題の質の改善に貢献する。その際、これまで実質的に「日本語」入試問題の役割を果たしてきた「日本語能力試験1級問題」や、「日本留学試験」の「日本語」がモデルとしたTOEFL、TOIECや、その他の「アカデミック・イングリッシュ・テスト」と比較対照するとともに、真に必要な「アカデミック・ジャパニーズ」のテストという観点を重視する。
- 2) 「アカデミック・ジャパニーズ」の実質的なシラバス（教育内容体系）を作成し、それにとつた教育方法や教材例を開発する。「日本留学試験に関する報告書」が提示している「アカデミック・ジャパニーズ」のシラバスは抽象的すぎて具体的な教育内容がそこからはうかがえない。これまですでに個々に「アカデミック・ジャパニーズ」教育をそれぞれの形で実践し、理論的にも考察してきている研究者間で共同研究をすすめ、大学入学前後の日本語教育機関の指針となるような具体的なシラバス・教育方法・教材を作成して提示する。
- 3) 国内外の大学入学前日本語予備教育機関と大学での日本語教育機関との連携のもとに、学習者の日本語能力習得の追跡調査を行ったり、それぞれの教育内容についての情報・意見交換を緊密に行っていくことによって「アカデミック・ジャパニーズ」教育への共通理解のもとでの日本語教育の一貫性を形成し、教育効果の向上に貢献する。

②日本語教育分野においてはこれまで「アカデミック・ジャパニーズ」に関する議論・研究はあまりなされてこなかった。そうした中で「日本留学試験」の「アカデミック・ジャパニーズ」の理念が一人歩きしている感がある。本研究では、「アカデミック・ジャパニーズ」研究に関して、「業績表」が示しているような先駆的研究を発表してきている研究者・教育者が結集して、今後の日本語教育の中心概念をなす「アカデミック・ジャパニーズ」を総合的・実践的に研究していく点に第一の特色・独創性がある。

第二に、「アカデミック・ジャパニーズ」の研究および「日本留学試験」の影響評価のために、国内外の大学入学前日本語予備機関と大学における日本語教育関係者との連携を推進する点も、これまでの日本語教育界で強く要望されつつもなかなか実践できなかった点であり、今後の日本語教育全体にとって重要な動きを形成しうる特色である。国内の日本語学校については嶋田和子氏（イーストウェスト日本語学校）が中心的な研究協力者となり、海外においては留学生の二大出身国である中国、韓国においては、それぞれ徐一平北京日本学研究中心長、李徳奉韓国日本学会会長というキーパーソンが研究協力者を承諾している。さらにアメリカ、オーストラリア、NZ、台湾、東南アジア、ヨーロッパ、中南米諸国にも研究協力者を求めて、「日本留学試験」や「アカデミック・ジャパニーズ」に対するそれぞれの国の日本語教育の対応を調査・研究して

いく予定である。

③ ②の後半で述べた海外研究協力者たちとの共同の調査・研究や、「アカデミック・ジャパニーズ」研究のために特に英語圏での「アカデミック・イングリッシュ」のあり方を参照枠組みとして研究することを通して、「日本留学試験」の評価や「アカデミック・ジャパニーズ」シラバス形成を核とした日本語教育の国際的な共同研究の土台形成に寄与しうるであろう。

さらに、「アカデミック・ジャパニーズ」の研究とシラバスの体系化は、現在必要度が強調されている日本人学生の日本語表現力養成のためのカリキュラムにも資するものとなる。